



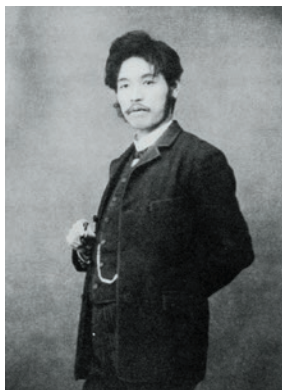
第2回

水戸の画家

市立博物館が発掘した水戸の画家、五百城文哉(1863-1906)。美術部門の学芸員がその魅力を語ります。
問合せ／市立博物館(☎226-6521)

【美術部門】

江戸時代から現代にいたるまでの、水戸にゆかりの深い美術家の絵画・彫刻・工芸などの作品を収集しています。年4回の展示替えを行い、所蔵作品を紹介しています。



五百城文哉肖像写真(個人蔵)

市指定文化財。青い空の下、そびえ立つ日光男体山、手前には青々とした苔、その上に20種類以上の色鮮やかな花々が描かれています

五百城は日光の風景を数多く描き、海外で高く評価されました



「日光陽明門」(博物館蔵)



「晃嶺群芳之図」(博物館蔵)
こうれいぐんぼうのず

博物館では、これまで、水戸ゆかりの画家を多く取上げ、展覧会を通して光をあててきました。その一人が、明治時代の洋画家・五百城文哉です。文久3(1863)年、水戸に生まれた五百城は、10代後半で東京へ移住し、洋画家・高橋由一のもとで本格的に洋画を学びました。27歳から東京を離れ、絵を描きながら地方を巡る生活を送ります。縁あって日光に落ち着き、42歳で没するまでの後半生を過ごしました。

人物や建物、農作業の風景など、さまざまな作品を描いた五百城。彼の画風の大きな魅力は、細かな部分まで丁寧に表現されているところです。例えば、日光東照宮を描いた作品では、複雑な構造の建物を見事に再現しています。さらに、高山植物の愛好家という一面も持ち、鋭い観察眼と優れた描写力によって、正確さと美しさを兼ね備えた植物画を多く残しました。

五百城は、植物の写生をもとに、幻想的な作品も生み出しました。その代表的な作品が、博物館で所蔵する「晃嶺群芳之図」です。花は一つ一つが浮き立つかのように描かれていて、とても美しい空間が表現されています。画材は、水彩の絵の具、絹の下地という、珍しい組合せです。記録としての写生にとどまらずに、植物の姿を芸術として一枚の絵画にまよめ上げたこの作品。植物への愛情と、芸術的なセンスが結びついた、五百城ならではの描き方といえるでしょう。

(水戸市立博物館美術部門学芸員 中村有紀子)

令和2年5月1日号
第1477号

【発行】水戸市 ☎029・224・1111(代表)
〒310-8610 水戸市中央1-4-1
ホームページ▶<https://www.city.mito.jg.jp>

【編集】みとの魅力発信課 ☎029・232・9107
☎029・224・5188 kounhou@city.mito.jg.jp